翔べ！世界へ

語り部から識字教育へ

留学中住んでいた
地方都市の市場の様子

たら旧宗主国のフランスに行った方が早い」というような状況だったが、私が「公共メディア」という問題意識を持つに到ったのも、理論的関心というよりも、マリ人の暮らし振りを身近に見つつ、自分自身も日常生活の範囲を超えた資料を手に入れようと四苦八苦したという体験による部分が大きい。このような形で問題意識を鍛えられたことは、大学よりもむしろ社会に留学することになった私が得た貴重な財産だと思っている。

留学後は途上国の基礎教育の研究に取り組む

マリへの留学の後、私は語り部の制度の歴史変化を主題とする博士論文を東大に提出し、その後は途上国の基礎教育、特に識字教育や職業訓練などのいわゆるノン・フォーマル教育を主たる研究課題に選んだ。そのためにアメリカで一年間途上国の教育開発について勉強したあと―マリとは対照的な留学体験だった―、ここ数年は大学で識字やメディアについて教えながら、南米のボリビアで教育学や言語学の専門家、現地のNGOと共同で「職業訓練における識字教育」をテーマとするアクション・リサーチを進めている。その分、調査研究という本業ではこのところマリとは疎遠になっているが、マリ北部の半砂漠地帯の小規模植林活動支援を行なう日本のNPOの運営委員としてもっぱら事務方のサポートに携わっている。

以前にもまして世界中が大きく変化した九〇年代、マリの研究教育制度も少なからず変化したことと思う。もしかすると今では留学生を対象としたカリキュラムなどもできているかも知れない。まあ仮にそうなっていたとしても、私が留学した頃とどちらが優れているなどと一概にいえるものではないし、ましてや国の貧しさの一つの表われでもあったかつての状況を美化するつもりもない。ただ、現在の自分の研究が、内容もスタイルも八〇年代のマリで語り部を研究課題とする留学生活を送るうちに形作られたものであることは、現在でも強く意識している。もし当時のマリにもアメリカ合衆国のようなきっちりとした研究環境があったとしたら、自分はその後どんな人生を過ごしていただろうか。ちょっと想像もつかないが、きっと今の自分とは別人のような存在に育っていただろうと思う。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学生が留学し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留学先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学生を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長　故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界二八カ国の大学・大学院へ一四一名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国三八八名の外国人留学生への奨学金の供与や文化教育面での事業運営を実施してきている。

お問い合わせ・連絡先：
経団連社会本部　人材育成グループ

奨学生体験者からの寄稿㉑

中村雄祐

なかむら　ゆうすけ

東京大学大学院総合文化研究科助教授

国際文化教育交流財団第13回生（1988年度）

84年東京大学教養学部教養学科卒業。86年同大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了。88〜90年マリ共和国留学。90年8月同博士課程中途退学、90年9月東京大学教養学部助手。東京大学教養学部専任講師を経て、97年より現職。

マリ共和国の世襲語り部の研究をめざして

私は国際文化教育交流財団の奨学金を得て、一九八八年から二年間、西アフリカのマリ共和国に留学した。研究課題はマリ共和国の伝統的な世襲語り部の活動、八六年に半年ほどの予備調査をした後の本調査が目的であった。ただし、留学とはいっても、当時のマリ共和国には大学はなかったため、首都バマコの国立人文科学研究所の客員研究員という身分での滞在であった。

マリは当時も今も経済的には実に貧しい国であり、研究所とはいっても小さな平屋の建物が一つきり、部屋には机と椅子のほかはわずかな書籍が本棚に並んでいるだけであった。そんなわけで、研究所のスタッフは遠い日本から来た若造を温かく迎えてくれたものの、授業やゼミがあるわけでもなく、指導教官や同級生との付き合い、日本の大学とは流儀の違う授業への当惑や興奮といった通常の留学であったら出会いそうな体験は、私の場合ほとんどなかった。

もっとも、そうした事態は八六年の予備調査ですでにおおよその見当はついていたことであり、留学生活の大半の時間は、首都から遠く離れた地方都市に借りた小さな部屋を拠点に、周辺の村を訪ね回ることで過ぎていった。もちろん、首都に戻るたびに研究所のスタッフに経過報告を行ない、さまざまなアドバイスを受けてはいたが、田舎に引きこもるのは文化人類学の調査としては標準的なスタイルであり、フィールドワークに出る前に大学でコースワークや指導教官との面談を経なくてもすむという点では、最初のうちは「好きなように動けて気楽だな」などと感じてもいた。

しかしながら、地方と首都の往復を繰り返すにつれて、最初のうちの気楽な留学という気分は、だんだんより重たいものへと変わっていった。社会の研究を志す大学院生の言葉としてはあまりにナイーヴに響くことは思うが、土地の人と身近に付き合いながら調査（というか生活）をしているうちに、ついつい洩らしてしまうのは「貧しいなあ」というため息のような感想であった。後から振り返ると、当時は長期独裁政権の末期、ちょうど世界銀行による構造調整プログラムを受けて公務員の大量解雇が行なわれるなど、社会全体が特に殺伐としていた時期でもあったのだが、好景気の日本から「語り部の研究」という多分に浮世離れした目的でマリを訪れた当時の自分にとって、「金がない」、「仕事がない」とこぼす人々―その中にはわが弱小研究所のスタッフももちろん含まれていた―と日々親しく顔を合わせて暮らすのは、やはりあまり気分のいいものではなかった。

不可避となった研究テーマの変質

こうした厳しい世間の洗礼を受けたためか、私の研究テーマは「語り部の活動」から、やがて「現代世界における〈文書・読み書き〉を介さないコミュニケーションのあり方」へと重心を移し、調査も次第に公共メディア、基礎教育、言語政策など、最初のうちは思いもしなかったような領域へと踏み込んでいくこととなった。語り部という中心テーマこそ一貫していたとはいえ研究としてはかなり大きな質的変化である。しかしながら、そんなことができたのも、今にして思えば、踏まえるべきカリキュラムも許可を得るべき指導教官もいない「気楽な留学」ゆえのことであった。

当時は「マリの歴史を調べたかっ